

天下一

大塚龍之介平政智

北辰一刀流兵法

第七代宗家



本記事の執筆にあたり、貴重な情報とお力添えをいただきました兵法タイ捨流（熊本県）山本隆博先生、天然理心流（東京都）フルチ・サンドロ先生に心より感謝申し上げます。

一、はじめに

本記事は、古流武術の分野で最も重要なテーマの一つである「天下一」について執筆しています。「天下一」という用語は、今もなお古流武術の世界で使用されており、天下最強の剣士を意味します。

「天下一」について執筆することに決めたのは、2018年9月に熊本周辺の温泉で友人であり剣術の先輩である兵法タイ捨流の免許皆伝をもつ山本隆博藤原定隆師範と一緒に寛いでいた

ときのことです。兵法タイ捨流は、戦国時代（1467-1603）中期、1570年頃に創始された流派で、約百年に渡る戦の歴史があります。いくつかの情報筋によると、兵法タイ捨流の開祖である丸目蔵人藤原長恵は、戦国時代に自らの称号として「天下一」を名乗り、京都の清水寺の前に「天下一」と書した看板を掲げました。そして、江戸時代（1603-1868）初期、柳生新影流兵法江戸派の宗家である柳生又右衛門平宗矩に決闘に挑みました。柳生宗矩は、将軍とその息子たちに仕える個人的な剣術指南役二人のうちの一人名として、また自らのためにも「天下一」を名乗りました。記録によると、柳生宗矩は、決闘に敗れて地位を失うことを恐れ、丸目蔵人の挑戦を拒みませんでした。代わりに、柳生宗矩は手紙に丸目蔵人を「西天下一」と認めると綴り、その時から自らの称号として「東天下一」を名乗りました。一部の情報筋によると、「天下一」の称号を分けることは、前の将軍である徳川家康の案でした。丸目蔵人は、この手紙のやり取りの後、正式に自らの称号を「西天下一」とし、この文字を刻んだ印章で公式文書に署名しました。タイ捨流は現在もこの印章を使用しています。



印章「西天下一」
兵法タイ捨流所蔵



丸目蔵人藤原長恵
兵法タイ捨流の開祖

歴史的観点から、「天下一」の称号は幕府や他の如何なる機関からも授与されませんでした。代わりに、その時代最強の剣士として歴史に名を馳せようとした剣士たちが、自らの称号として「天下一」を名乗りました。容易に聞こえるかもしれませんが、実際にこれを封建時代に行うことは非常に危険な行為でした。自らを「天下一」と名乗ることは、必然的に自分のみならず流派も大きな注目を集めたことでしょう。当然、全国から剣士たちが道場を訪れ、道場がない者には直談判し、死をも覚悟した試合（決闘）をすることになりました。

「天下一」を名乗ることがもたらす敗北のリスクが高いことを考え、総じてすでに戦で高い評判をもち、確固たる自信をもつ剣士だけが、自らの称号として「天下一」を名乗りました。

「天下一」を名乗り、すべての挑戦者に勝利すると、多くの門下生がその流派の門を叩きました。つまり、多くの人が最強の剣士の下で直接、生きた指導を受けたかったのです。戦い

に勝利した剣士の流派に、かつての挑戦者が入門することは非常に一般的でした。これは、決闘で命を落とさなかった場合に、挑戦者がいつの日か「天下一」の剣士に勝るため最良の選択でした。

歴史上、致命傷を負うことのない決闘は、死を懸けた決闘に比べ、遥かに一般的でした。決闘は主に、竹刀または木刀で行われました。決闘の目的は、誰の技が優れているかを証明し、より強い相手に敗れ上達することにあつたので、死を懸けて戦うのは非常に稀なことでした。相手を殺すことが、優れた技術、技、また戦略を証明できるとは見なされていませんでした。技術を比較するための決闘は数試合におよぶことがほとんどだったので、剣士は運だけで勝利を得ることは出来ませんでした。そうしてより多く勝利した剣士のみが、優れた技術をもっていると宣言できました。死を懸けた決闘のほとんどが、竹刀または木刀を使った決闘の後、どちらかがその結果を不服として受け入れなかった場合に起こりました。もちろん、目障りな敵を排するためなど悪質な理由の場合もありました。

試し合いの有名な例として、戦国時代中期に行われた上泉伊勢守信綱（新陰流兵法の開祖）と柳生石舟斎平宗厳（柳生宗矩の父、柳生新陰流兵法の開祖）の決闘があります。柳生家に残された文書によると、二人の剣士は 1564 年に奈良の宝蔵院にて立ち合いました。誰がより強い剣士であるかを証明するため、両者は三日間に渡り、それぞれ数試合におよぶ三度の決闘を袋竹刀で行うことに同意しました。その結果は火を見るよりも明らかで、柳生宗厳は上泉に三度の決闘すべてで打たれ敗れました。別の情報筋によると、柳生宗厳が立ち合ったのは上泉の甥で弟子でもある疋田文五郎だったとあります。上泉は、甥に戦の経験が必要と考えたのでした。しかしながら、決闘の結果は、出典が如何なるものであっても同じく、柳生宗厳は破れて上泉信綱の一番弟子の一人となり、後に自身の流派である柳生新陰流兵法を創始しました。

ここで注意したいのが、稽古で一度も自由な打ち合いをすることのない流派がいくつか存在していたということです。こうした流派の剣士たちも、他流派から挑戦を受けた場合、さまざまな形他流試合（異なる流派間の決闘）で流派の面子を守らなければなりません。試合稽古をしなかった非常に強い流派のよい例に、薩摩地方の示現流兵法があります。文献『武芸の相伝書一詳解・示現流聞書喫緊録』によると、1604年2月、示現流の開祖である東郷重位は、島津藩の剣術指南役でありタイ捨流の免許皆伝をもつ東新之丞と共に試し合いに招待されました。この決闘は、島津藩の家老平田によりお膳立てされたものでした。決闘は大竜寺の内城跡で、自身も熱心な剣士であった大名島津家久（忠恒）の前で行われました。

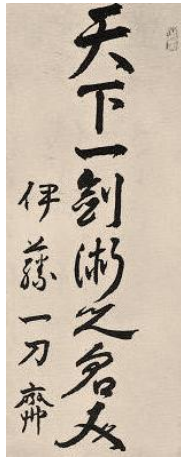
決闘は屋内の畳の上で行われ、東郷重位が打った衝撃で東新之丞の木刀が二つに折れ、柄が床に落ち、切先が障子を破り外の池に落ちたといわれています。新之丞は両手首を打たれ、敗北を認めました。その後、重位は別の部屋へ移されました。島津家久は指南役が決闘で打たれたことに激怒したようで、東郷重位との決闘で折れた木刀を掴みました。重位が動かずにいると、家久は木刀を重位に向かって投げ、剣を抜きました。重位は相手が大名ということのを忘れ、鬼のような目で睨みつけました。それを見た家久が刀をおろし、重位はすぐに九メートルほど後ろに下がり、謝罪したと伝えられています。島津家久はこれに感銘し、島津藩の剣術指南役として東郷重位を雇いました。これは、重位の四十七回目の決闘として記録されています。

示現流は稽古で決して自由な打ち合いをしないにもかかわらず、何世紀にも渡り、示現流の剣士が他の流派の剣士よりも優れていることを証明した事例が数多く記録されています。こうして記録された試合は、木製または竹製の武器を用いて戦う致命傷を負うことのない試し合い、または死を懸けて真剣で戦う決闘のどちらかでした。「天下一」を名乗るため、試合稽古のある流派に入門する必要は決してありませんでした。しかしながら、剣士が自らの称号として「天下一」を名乗る場合、封建時代の決闘の礼儀と習慣に従い、挑戦者を受け入れなければなりません。闘争心、または競争心のない態度は、封建時代の日本では受け入れられず、臆病で不名誉な振る舞いと見なされました。

二、称号「天下一」を名乗った名剣士

何世紀にも渡り、多くの剣士が自らの称号として「天下一」を名乗りました。日本の歴史上、「天下一」を名乗った最も有名な剣士が、伊東一刀斎景久、宮本武蔵玄信、千葉周作成政の三人です。ここで注意したいのは、千葉周作とは対照的に、伊東一刀斎と宮本武蔵の生涯については、学術的に意味をもつ史料が僅かで、詳細がよく記録されていないことです。その理由は、彼らが生きた時代背景によるものです。戦国時代、また江戸時代初期の試合は、記録されないことがほとんどでした。これは、試合や戦の勝敗に関する情報のほとんどが、彼らの死後に作成されたため、学術的に意味をもつ証拠はなく、創作と見なされることを意味します。それにもかかわらず、彼らのサクセスストーリーは伝説となり、本、映画、そして現代のポップカルチャーに影響を与えてきました。唯一確かなことは、三人全員が自らを「天下一」と名乗ったことです。

- 伊東一刀齋景久（1560年頃 – 1653年頃）



「天下第一剣術之名人」伊東一刀齋景久
称号「天下第一」の書



伊東一刀齋景久
一刀流兵法の開祖

伊東一刀齋は戦国時代末期から江戸時代初期にかけて、日本中を武者修行で旅し、多くの流派の剣士たちと戦いました。当時は、一刀齋のような浪人の多くが国中を彷徨い、出来るだけ多くの決闘をすることで、剣の道にその身を捧げていました。当時、頻繁に起きていた戦で、浪人たちはしばしば、さらなる戦の経験を得るため、大名の一時的な傭兵として仕えました。こうして雇われた浪人のほとんどは、生き残るために仕事を探していた犯罪者にすぎませんが、運が良ければ、藩に席を置き、安定した収入を得ることができました。その中には、真剣に剣の道を志す者もいました。

生涯を剣に捧げた伊東一刀齋のような剣士は、剣術を通し自らの体と精神が一つになるよう鍛錬し、うまくいけば悟りを開くことができました。このため、剣士たちは武者修行を続け、修行し、瞑想し、戦うことで、互いに切磋琢磨しました。強い相手と戦うため、武者修行中の剣士はしばしば自らが町に滞在していることを公表し、戦うことをいとわない人々を探しました。伊東一刀齋が村や町に滞在する際は、たいてい中心部に一番近い旅館に泊まり、旅館の前に「天下第一」の書と、その横に自らの名を書いて置きました。こうした話は、すぐに村や町全体に広まり、勇敢な人々が「天下第一」の称号に異議を唱えるべく集まりました。そして、敗れた人々の多くは後に門下生となりました。伊東一刀齋は、隠居し遠く離れた寺で僧侶となるまで、決闘に敗れたことはなかったそうです。一刀齋の後継者である神子上典膳は、徳川幕府で剣術の指南役となりました。その間、一刀流は全国で最大規模となり、最も影響力のある最強の流派として栄えました。

- 宮本武蔵藤原玄信（1584年頃 - 1645年）



宮本武蔵藤原玄信
兵法二天一流の開祖

「天下一」を名乗ったもう一人の有名な剣士に、宮本武蔵藤原玄信がいます。剣に生き、決闘に生涯を捧げた浪人であり、その人生は、後の時代に多くの物語や本になりました。宮本武蔵は、二刀流で名を馳せ、流名を兵法二天一流と名付けました。剣士として、一度も敗れることなく六十一回の決闘に勝利したと言われていますが、その決闘の大部分が公な試合ではなく、第三者によって記されることもなかったため、これを検証することは不可能です。その一方、自らの称号を「天下一」としていたことは確かなようで、当時、宮本武蔵は自分が教えていた道場の前に「天下一」と書した看板を掲げていたようです。



「五輪書」宮本武蔵の最も有名な著書

宮本武蔵は剣士であり、画家であり、哲学者でもありました。著書「五輪書」は、現在でも偉大な哲学書の一つとして賞賛されており、複数の言語に翻訳されています。

- 千葉周作平成政（1792年 – 1855年）



千葉周作平成政
北辰一刀流兵法の開祖

自らの称号として「天下一」を名乗った剣士の中で、最も優れた記録が残されているのが、私の流派、北辰一刀流兵法の開祖である千葉周作平成政です。1820年代の初めに「天下一」を名乗った際、すでに千葉周作は全国で最強と謳われていた流派の剣士たちを相手にした試合で、信じられないほどの勝利を取っていたと記録されています。1822年、江戸橋（現在の東京都中央区日本橋品川町）の近くに自らの道場である玄武館を開き、「天下一」の称号を公にしました。千葉周作は、「当流は、技を試すことをいとわないすべての挑戦者のために門を開いています」と書いた立て看板を道場の前に掲げました。江戸の中心、しかも、江戸時代に脈動する貿易の中心地であった江戸橋のすぐ隣に道場が位置することを考えると、これは非常に大胆な行動でした。

毎日、道場の前を通り過ぎる何万人もの人々がこの看板に目を留め、「天下一」を名乗る新しい剣士の噂はすぐに広まりました。こうして、大勢の武士が玄武館を訪れ、千葉周作と直接対決すべく、師範たちに勝負を挑みました。千葉周作は、すでに立派な剣士として名を馳せていた上位伝位の挑戦者のほとんどに一人で立ち向かい、全員を打ち負かし、「天下一」の名をほしいままにしました。これにより、その名声はすぐさま広まり、門下生の数は一気に増え、北辰一刀流は創始から最初の十年間で、全国で最も強く、最大規模をもつ三つの流派「三大流」の一つとなりました。



千葉周作が所持した刀（銘：順重）

千葉周作は生涯で、百戦を戦い抜いたと言われています。そのうちのいくつかは死を懸けた戦いでしたが、ほとんどが致命傷を負うことのない戦いで、木刀または竹刀のいずれかを用いて行われました。

1185 年の鎌倉時代の始まりから現在に至るまで、試合に木製または竹製の武器を用いることは、多くの古流で今もなお非常に一般的です。つまり、決闘の多くは強い剣士を決めるために行われ、殺し合いのためには行われませんでした。もちろん、致命傷を負うこともありましたが、技の比較のため試合中に相手を殺すことは、必ずしも重要ではありませんでした。伊東一刀斎、宮本武蔵、千葉周作の記録に残る決闘のほとんどが、致命傷を負うことのない戦いでした。



二人の剣士による致命傷を負うことのない形式での伝統的な試合の様子。試合中、剣士は共に竹刀を使用し、1900 年代初めに現代剣道で採用された鎧（防具）を部分的に装着しました。この種の試合稽古中に、どちらがより強い剣士であるかを相手を殺すことなく見極めるのは、容易なことでした。

三、1868年の近代化後の試合

1868年の明治維新後、日本は一步ずつ近代化し、武士階級はその後の数年間でさまざまな特権を失いました。また、明治時代（1868～1912）になると、死を懸けた決闘は禁じられました。その頃から、一般的な試合は竹刀または木刀を用いて行われるようになり、真剣勝負は寸止めでの戦いのみとなりました。寸止めは、高度な技術を要する非常に危険な稽古でした。真剣勝負中に、剣士の一人が真剣により死亡した場合、法律により殺人と見なされ罰せられました。決闘罪は、明治時代の制定以来、今もなお変わらない日本の法律です。死を懸けた決闘を除き、より強い剣士を決めるため木刀や竹刀を用いて行われる致命傷を負うことのない試合は、江戸時代と同様に現代でも合法です。

第二次世界大戦後、またアメリカによる日本占領の間、多くの古流は劇的な変化を遂げました。1940年代までは、当時存在していた古流の90%以上が他流試合（異なる流派間での試合）を行っていましたが、戦後それは劇的に変化しました。アメリカ人たちは、戦争で勝利し日本を占領した後（マッカーサー将軍の公式命令により）、あらゆる武道の稽古と練習を禁止しました。1950年代に、この禁止が解除された時には、すでに平和主義的思想が多くの古流武術流派や、現代武道（剣道、合気道、居合道など）に深く根ざしていました。他流試合の稽古で知られ、かつて撃剣で強さを誇った伝統をもつ宗家と師範の多くは、古くから続く方法で本物の稽古をすることで、戦争屋と見なされることを恐れました。第二次世界大戦後の現代剣道、居合道、柔道、杖道などは、実際の戦いの応用としても軍事訓練としても意味のない文化的スポーツにすぎないと公言し、西洋化され、平和に慣れた日本社会と調和するため、多くの古流の師範もその後には続きました。これに伴い、多くの古流が他流試合で他の流派と戦い挑戦することを控え、孤立していきました。多くの流派では、試合稽古も衰退し、現在は形稽古のみに焦点を絞った稽古をしています。こうして、「戦わない」「競争しない」ことは、古流武術の主な特徴として、広く認識されるようになりました。このことは、20世紀にさまざまな古流武術の流派で起こった退化を明確に表しています。



剣術と槍術の試合。日本の決闘は、ヨーロッパの決闘のように同じ武器を用いるという試合規則はなく、武士は訓練を受けたあらゆる武器を使用できました。

現在、江戸時代と全く同じように稽古をしている本格的な古流の数は僅かであり、そうした流派はその教えと伝統を忠実に保存し受け継いでいます。かつて有名だった古流やその一派を系統にもつ多くの古い流派も現存していますが、第二次世界大戦後の西洋化と平和的思想に大きく影響され、道場から試合稽古は姿を消し、他流試合の申し出を受けることもなくなりました。

四、現代の「天下一」

第二次世界大戦後、「天下一」の称号は剣士にとって公に名乗れるものではなく、天下最強の剣士になることを真剣に目指す者は少なくなりました。だからこそ私は、剣の道の歩みや、これまで戦ってきたさまざまな他流試合、そして古流武術の未来への希望について、ここに書したいと思います。



伝統的な古流武術では、門下生の技術段階の能力証明として巻物を授与していました。級・段制度、また色帯は現代の制度であり、日本の伝統的な武術の制度ではありません。こうした近代的な階級制度は、1900年代初めに生まれました。

私は、2010年にドイツから日本へ移り住み、第六代宗家大塚洋一郎平政徳の内弟子として北辰一刀流兵法に入門し、「現代に生きる最強の剣士になる」という夢を抱きました。夢や目標をもつことは、今日に至るまで意欲的に稽古と勉強に取り組む力を与えて続けてくれます。

先代宗家は非常に強い剣士であり、2016年に正式に引退するまで、封建時代の有名な剣士の教えに忠実に生きるよう努めた、現代に古流武術を伝える数少ない一人でした。また、北辰一刀流は今も現存する数少ない古流の一つであり、昔と全く変わらない稽古を行うため、大塚洋一郎宗家の下で修行し学ぶことは、非常に厳しく痛みを伴うものでした。私の筋肉は、毎日七時間から十時間以上におよぶ稽古により鍛えられました。宗家はよく稽古中に、自分の限界を超えるよう私に教えました。私の顔、手、腕、足の傷あとはすべて、宗家の下で多くの試合稽古を行った確固たる証拠です。しかし、こうした経験はどれも、初めて宗家と試

合稽古をした日のように記憶に焼きつくようなものではありません。当時十八歳だった私の剣士としての自信は、その日の夕方、完全に打ち砕かれてしまいました。あの日のことは、まるで昨日の事のようにはっきりと脳裏に焼きついています。当時の私は入門したばかりの初心者でしたので、通常ではありえないことですが、直接宗家と試合稽古ができる大変光栄な機会をいただくことができました。通常は、師と弟子が強い信頼関係を築くまで、こうした試合稽古を行うことは出来ません。

どちらにせよ、この試合稽古で私は完全に打ちのめされ、翌日は身体を自由に動かすことすら出来ませんでした。最初の試合稽古で、先代宗家が初めて抜き足切りの技で私を倒した際に負った傷あとが、今も右の脛に残っています。この夕方の出来事は、私の最大の敗北であると同時に、剣士として生きる上で最大の勝利だったと考えています。先代宗家は、当時の私の剣士としての弱さを教えてくれ、その後、強くしてほしいと懇願した私を内弟子として受け入れてくださいました。それ以来、流派の技と教えを完全に習得するよう学び、宗家より免許皆伝を伝授されました。私の剣士としての成功のため、宗家は私を道場養子として迎えました。二年後、私は宗家の後継者として、東京都で執り行われた襲名披露式典で、第六代宗家・大塚洋一郎と第五代宗家・千葉弘の命を受け、北辰一刀流兵法第七代宗家に就任しました。



大塚洋一郎平政徳
北辰一刀流兵法 第六代宗家

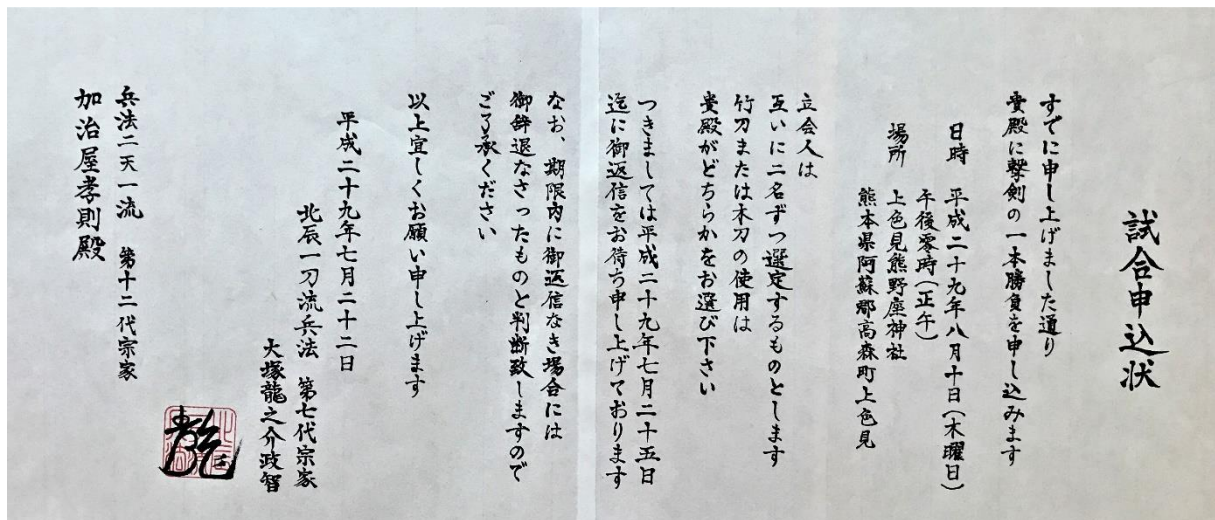


筆者 大塚龍之介平政智
北辰一刀流兵法 第七代宗家

2012 年夏に初めて公式の他流試合を行ってから現在までの約八年間、私は十以上の異なる古流と現代流の宗家、師範、上位伝位の門人に一度も敗れることなく他流試合を行いました。

こうした試合は、竹刀、木刀、または真剣で行われました。竹刀と木刀を用いた試合は直接打撃制で行われましたが、真剣を用いた試合は寸止めで行われました。

これまで私が他流試合を挑み立ち合ったのは、天念理心流、小野派一流兵法、鹿島神傳直心影流、野田派北辰一刀流、天真正自源流兵法、天真正伝香取神道流、無外流、武州傳氣樂流、兵法二天一流、一刀正伝無刀流、無双直伝英信流、夢想神伝流、神道夢想流などの流派の剣士たちでした。また、私は全日本剣道連盟の高位有段者（八段以下）たちと撃剣試合で戦いました。積極的に他流試合に取り組むことで、私は常に稽古を重ね、技を磨き、切磋琢磨して参りました。また、現代のボクシングとは異なり、古流武術では金銭を賭けて戦うことは不名誉と見なされます。代わりに古流武術では、経験、自己啓発、名声、名誉のために戦います。



2017年に筆者より宮本武蔵の後継者であり兵法二天一流の第十二代宗家加治屋孝則へ送った試合申込状。この戦いは後に、加治屋宗家より正式に挑戦を受けることはできないとお申し出があったため、鞘の内の勝ち（刀を抜かずして勝ちを取めること）に勝利しました。

昨今、さまざまな流派の宗家と師範へ私が送った挑戦はすべて拒まれました。一部の人は流派の面子を失うことは望まないのを理由とし、他の人々からは挑戦しても勝ち目がないとの明白なお申し出がありました。約一年もの間、私が出したすべての挑戦が拒否されていることにひどく落胆しています。

この本を読んだ世界中の剣士が、意欲的に剣の道に進み、丸目蔵人、伊東一刀斎、宮本武蔵、千葉周作など多くの剣士と同じ想いで、「天下一」を志すことを心から願っています。古流剣士の大多数が、再び「天下一」を名乗ることを志すようになれば、現存する古流に大きな利益をもたらすと私は強く信じています。私はこの道

を歩むことに最善を尽くし、戦い続けることで「天下一の剣士」にふさわしい人間となるよう切磋琢磨します。

私を含め、当流派の師範、門下生たちは、剣の道を共に歩く剣士たちと試合できる日を心待ちにしています。開祖千葉周作によって制定された北辰一刀流兵法の規則により、当流は古流または現代剣道、居合道を背景にもつすべての挑戦者を受け入れています。自らの技術を撃剣他流試合稽古で試したい方は、当流の上位伝位または下位伝位の剣士を相手に竹刀で戦うことができます。お気軽にお問い合わせください。私自身は、「武芸流派大事典」に掲載のある正統な古流の宗家または師範からの挑戦をすべて受け入れています。自らの技術を試したい方は、当流まで直接お問い合わせください。すべての剣士の挑戦と、流派の発展を楽しみにしています。



情報提供およびご協力いただきました流派：

- 兵法タイ捨流 www.taisharyu.jp
- 天然理心流 www.tennenrishinryu.net
- 示現流兵法 www.jigen-ryu.com

参考文献：

- 笹森順造（1965）『一刀流極意』一刀流極意発行会
- 宮本武蔵（1643-1645）『五輪書』
- 高野苗正（発行年不明）『一刀流聞書』発行元不明
- 千葉周作（1915）『剣法秘訣』千葉勝太郎編
- 綿谷雪・山田忠史（1978）『武芸流派大事典』東京コピイ出版部
- あさくらゆう（2014）『千葉一族の北辰一刀流に係る履歴』
- 千葉栄一郎（1942）『千葉周作遺稿』桜華社
- 山田官司編（発行年不明）『千葉成政先生夜話聞書』青山文庫
- 山田次朗吉（1925）『日本剣道史』東京商科大学剣道部
- 綿谷雪（1967）『図説・古武道史』青蛙選書
- 山本邦夫（1981）『埼玉武芸帳』さいたま出版会
- 渡辺一郎（1967）『幕末関東剣術英名録の研究』渡辺書店
- 星耕司、小西重治郎（1993）『よみがえる北斗の剣～実録北辰一刀流』河出書房新社
- 榎本鐘司編（1991）『撃剣試合覚帳』伊予史談会文庫蔵
- 柳生巖長（1989）『正伝・新陰流』講談社
- 村山輝志（2002）『武芸の相伝書一詳解・示現流聞書喫緊録』示現流研究会
- 『日本の剣豪（全五巻）』旺文社

資料提供：

- 北辰一刀流兵法口伝
- 一刀流兵法口伝
- 創造広場「アクトランド」保存記録
- 兵法タイ捨流道場 龍泉館
- 大塚家保存記録

参考記事：

- 友田満（2013）『剣豪 流派と日本刀～幕末三大江戸道場と志士たち』2013年3月10日号、日本文芸社
- 『絵図と写真に見る剣道文化史』（2014）全日本剣道連盟
- 『剣 日本の流派一歴史に息づく古流の剣』（2015年9月）笠倉出版社